

第74回全道高等学校演劇発表大会 in 小樽「運河きらめくオタルナイ大会」

上演番号6番 北海道余市紅志高等学校（後志支部）

「ある雪の日の美術室」 作：千葉和代・余市紅志高校演劇部

この物語は父親の横領事件で転校することになってしまった“はな”と、自分の行きたかった高校に行けなかった“うみ”の、境遇が対照的な二人の美術部員が織り成す静かで不思議な1時間だ。緞帳が上がる前に横領事件のニュースが流れる。この演出により、無駄な視覚的情報に頼らずとも必要な内容が自然と入ってきて想像しやすくなっていた。石膏像のシーンでは、“はな”の心を表していたり、クラスメイトの声を表現していたり、他にも説明口調であるはなの言葉を代弁して心情描写を残すなど、多彩な使い方をしていた。



「しょうがない」と言いながら本当は学校を辞めたくない“はな”と、「しょうもない」と言いながら周りに流され続け、学校を辞めたい“うみ”が対比関係になっているが、似ている部分もあった。“うみ”は高校受験に失敗して流れるままに入学、しょうもないと言っていたが、その中には努力しなかった自分もいると思っているように見えた。そんな過去を“はな”と重ねていたのではないかと意見があった。だが「しょうが

ある」と先生に言われて、まだ夢を見られると思い入部したのではないかと感じられた。二人の独特なテンポによる会話や間、石膏像との会話、音響が明るい曲調のはずなのに暗くなっていくなど、淡々と物語が進んでいく中に自然と惹きつけられていく様が心地よかった。特に“はな”の心情には共感できる部分が多く、印象深かった。父親は警察に連行されて、母親は泣いている中で自分をいつも通りに、強く保たなきゃいけないという意味と、純粹に母親を想う気持ちから、教頭先生の「山」のポーズを参考に、ずっと手を横にしていたのではないかといった意見があった。



教頭先生は巡回で美術室を訪れるが、「表面だけでなく裏側も見てみる」というアドバイスがこの作品全体に通ずるのではと思われた。この日は、“はな”と“うみ”が出会った最初で最後の部活



であって儚さが強調されている反面、世間ではただの雪の日かもしれないが二人にとっては特別な雪の日だったのではないかという意見があった。“はな”が言った「私の分まで卒業してね」という言葉には「自分のようにならないでほしい」など、解釈の違いによるいろいろな意味が込められていると感じた。最後のピアノの音色は、雪が止み、月の光が差し込んだこと

による希望を感じさせ、“はな”と“うみ”がこれからどう歩んでいくのか、また、“はな”がどう変わっていくのかが気になる現実味のある作品であった。